

大学図書館が実施する学習支援・教育支援サービス：北米の事例から見えるもの

三重大学附属図書館研究開発室准教授

長 澤 多 代

はじめに

近年の日本の大学では、教育の質保証を目指して、能動的な学修（アクティブラーニング）への転換や教室内外の学修時間の確保を図りながら、学生の生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を育成することがこれまで以上に求められるようになった。その中で、主体的な学習を支える図書館の機能強化が求められている¹⁾。このような背景のもと、多くの大学図書館は、試行錯誤をもとに、学生に対する学習活動の支援（学習支援）や教員に対する教育活動の支援（教育支援）に取り組んでいる。その中で、現状を評価し、今後の方向性を検討するベンチマークを得るために、国外の先進的な事例を知ることは有用である²⁾。

本稿の目的は、米国やカナダの大学図書館が取り組む学習支援や教育支援の事例をもとに、大学教育改革に果たす図書館の役割を検討することである。全体は5章からなる。第1章では、日本の大学教育改革と図書館の関係を整理して述べる。第2章では大学図書館が実施する学習支援について、第3章では教育支援について、第4章では学習支援や教育支援を実施するための支援体制について、北米の事例をもとに説明する。第5章では、北米の事例から得られた知見を整理して述べる。

1. 大学教育改革と図書館

大学図書館の学習・教育支援機能と関係の深い大学教育改革の取り組みを、大学全体、大学教員、大学図書館の点から整理して述べる。

大学には、ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）、アドミッション・ポリシー（入学者受け入れの方針）を策定することが求められてい

る。このうち、ディプロマ・ポリシーは、学部や学科が教育活動の成果として、学士課程教育の修了時に保証する最低限の学生の資質を明記したものである。重要なのは、“最低限”という部分である。大学が、その最低限の資質を卒業生全員に等しく保証することを意味する。この資質の保証を実現するための仕組みとして、大学には、キャップ制によって履修登録ができる単位数の上限を設定したり、成績評価を厳格化したり、教室や図書館などの物理的な環境やeラーニングのための仮想的な環境など教室内外の学習環境を整備したりすることなどが求められている。

大学教員には、授業のための事前の準備、授業の受講、事後の展開を促すアクティブラーニング型の授業を設計すること、授業外学習（予習、復習、課題）についても、シラバスで十分な指示を与えることが求められている（表1）。

表1 能動的学修（アクティブラーニング）型の授業への転換（中央教育審議会，2012）

授業のための事前の準備	資料の下調べや読書，思考，学生同士のディスカッション，他の専門家等とのコミュニケーション
授業の受講	教員による直接指導，教員と学生，学生同士の対話など
事後の展開	授業内容の確認や理解の深化のための探求等

中央教育審議会の答申によれば、アクティブラーニングは、教員による一方的な講義形式の教育方法とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称である。学習者が能動的に学習することによって、認知的能力、倫理的能力、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図ること、その結果として、学習成果が向上することを期待している¹⁾。

大学図書館は、学習成果の向上のために、多様な学習支援や教育支援を提供することができる。まずは、初年次教育科目その他の授業科目で図書館ガイダンスや科目関連の情報利用指導（科目関連指導）を実施したり、パス・ファインダーを提供したりすることがある。また、授業外（教室外）の学習時間を確保するための学習環境として、ラーニングコモンズ等の学習空間を整備することがある。FD（ファカルティ・ディベロップメント）等による教員に対する支援として、新任教員に図書館のオリエンテーションを実施したり、新任や現職の教員を対象にした情報検索や教材開発に関するワークショップを実施したりすることがある。また、教員と同様に、SD（スタッフ・ディベロップメント）等による他部署の職員や大学院生への支援に加えて、自らに求められる専門的資質を検討したり資質開発に努めたりすることがある。

2. 学習支援：情報リテラシー教育

2. 1 情報リテラシー

情報リテラシーの定義は多様であるが、米国大学図書館協会の「高等教育のための情報リテラシー能力基準」では、情報が必要なときに、それを認識し、必要な情報を効果的に見つけ出し、評価し、利用することができるように、個々人が身につけるべき一連の能力と定義している（表2）³⁾。

表2 高等教育のための情報リテラシー能力基準
（米国大学図書館協会，2000）

基準 1.	必要な情報の性質と範囲を見定める
基準 2.	必要な情報に効果的効率的にアクセスする
基準 3.	情報と情報源を批判的に評価し、選択した情報を自らの知識基盤と価値観に組み入れる
基準 4.	個人として、あるいは、グループのメンバーとして、特定の目的を達成するために情報を効果的に利用する
基準 5.	情報の利用とアクセスを取り巻く多くの経済的、法的、社会的な問題を理解し、倫理と法律に反しないように情報を利用する

主体的な学習者を育成するためには、情報リテラシーの向上や習得を図ることが重要になる。

2. 2 大学図書館による学習支援の枠組み

学習支援には、学生が授業科目の履修その他に必要な学習を進めたり、情報リテラシーを向上させたり習得したりするのを支援する多様な活動が含まれる。本稿では、図書館が実施する情報リテラシー教育の総称と同義で用いている。

情報リテラシー教育は情報リテラシーの向上や習得を支援する多様な取り組みである。『図書館利用教育ガイドライン』では、情報リテラシー教育に関する多様な取り組みを、印象づけ、サービス案内、情報探索法指導、情報整理法指導、情報表現法指導のもとに分類し、それぞれの学習内容や方法の枠組みを示している（表3）⁴⁾。

表3 情報リテラシー教育の枠組み
（日本図書館協会・図書館利用教育委員会，2003）

レベル 1	印象づけ （図書館の存在・役割・機能）	ポスター、パンフレット、ちらし、オリエンテーション
レベル 2	サービス案内 （設備の配置、サービスの種類）	図書館の見学ツアー、館内のサイン、学内の広報誌
レベル 3	情報探索法指導 （情報資源の検索、情報の評価）	科目関連指導（授業、ゼミ）、独立科目、チュートリアル、講習会、カウンターでの指導、パスファインダー、独習用ツール、ワークブック、テキストブック
レベル 4	情報整理法指導 （要約・引用、記録・発想法）	
レベル 5	情報表現法指導 （レポート、口頭発表、著作権）	

各大学図書館にすべての取り組みを実現することが期待されているのではない。各大学の文脈やニーズをもとに、図書館員が必要な取り組みを判断して採用することが必要になる。このうち、レベル3～5にある科目関連指導が授業科目とのかかわりが深い。

科目関連指導は、特定の授業科目の学習や研究の課題で必要とされる情報探索法・整理法・表現法に関する講義や演習である。通常は、教員からの要請を受けて図書館員が授業時間の一部を用いて実施する。主な学習目標は、次のとおりである。

- 学生が、図書館や図書館員が自分たちの学習活動を支援する機関（職員）であることを認識する。
- 学生が、情報を利用するプロセス（情報探索、情報整理、情報表現）の全体像を理解する。

- 学生が、情報を探索するのに有用な道具（目録やデータベースなど）を理解し、効果的に用いて探索できる。

2006年の時点で、141大学が情報リテラシー教育に関する授業を実施し（調査対象194館の73.4%）、そのうち95大学（同49%）は図書館員が授業科目の一部もしくは全体に関与する情報リテラシー教育を実施している⁵⁾。後者は科目関連指導に分類できると考えられるが、そのすべてが教員と実質的な打ち合わせを重ねた上で設計した科目関連指導ではないと考えられる。2. 3で述べるが、北米では、教員と連携した科目関連指導の例が多くみられる⁶⁾。国内でも、静岡大学や大阪大学など、教員と図書館員による実質的な連携をもとに科目関連指導を実現し、その成果を公表する例も見られるようになった^{7) 8)}。

2. 3 学習支援の事例

2. 3. 1 アーラム・カレッジの科目関連指導

アーラム・カレッジ（Earlham College）は、米国のインディアナ州にある小規模の教養カレッジで、多くの授業科目で科目関連指導を実施している。ここでは、1年次の必修科目である「アーラムセミナー」を紹介する。科目関連指導の内容は担当する教員によって異なるが、この例では、1名の図書館員が授業時間のうち60分を用いて科目関連指導を実施している⁹⁾。場所は、図書館の1階にある閲覧室の一角のコンピュータ・エリアである。当日には、11名の学生と教員が参加した。

内容の構成は次のとおりである。

- ① 図書館員による自己紹介：図書館員が、氏名と自身の役割に加えて、オフィスの場所や連絡先を伝える。その中で、質問があれば、学生はいつでも図書館員のオフィスに立ち寄ることができる伝えてる。
- ② 図書館で利用できる資料：図書館員が、この授業科目のために作成したパス・ファインダーを印刷して配布し、Web上にアップしたパスファインダーを示しながら、冊子体の一次資料と二次資料（参考図書）、データベースの種類と情報の基本的な探索法について説明する。
- ③ OPACを用いた情報探索：図書館員が、索引の使い方を説明し、アーラム・カレッジの図書館のOPACを用いた情報探索方法を説明する。その中で、効果的な検索式を設定する方法、アーラム・カレッジの図書館に所蔵がなかった場合には相互貸借によって他大学から文献を入手できること、相互貸借の依頼の手続きについて説明する。
- ④ 冊子体の参考図書：図書館員と学生が図書館の1階の参考図書のコーナー（コンピュータ・エリアに隣接）に移動し、参考図書の書架配列と請求記号について、図書館員が書架や現物を示しながら説明する。
- ⑤ データベースの検索法：コンピュータ・エリアに戻り、図書館員が、アーラム・カレッジの図書館で利用可能なデータベースを説明し、キーワードを用いた検索法を説明する。そして、所蔵されている文献が貸出中の場合には予約ができること、文献を予約する手続きについて説明する。また、書誌事項や貸出状況など検索結果の読み取り方についても丁寧に説明をする。
- ⑥ 著者名検索：図書館員が、OPACを用いて、著者名検索の方法について説明する。同時に、特定の人物について知らべるときには、その人物の情報だけでなく、その人物が生きた時代や活躍した地域など背景となる一般的な情報についても調査をすることが重要になることを説明する。そして、その人物にゆかりの

- ① 図書館員による自己紹介
- ② 図書館で利用できる資料
- ③ OPACを用いた情報探索
- ④ 冊子体の参考図書
- ⑤ データベースの検索法
- ⑥ 著者名検索
- ⑦ 雑誌記事データベース
- ⑧ まとめ

ある国をキーワードにして、キーワード検索をする。

- ⑦ 雑誌記事データベース：図書館員が、雑誌記事データベースその他のデータベースの検索方法、各データベースの特徴や違いを説明する。その中で、紙媒体の論文を入手する方法、アラム・カレッジの図書館における雑誌架の場所を説明する。また、雑誌と学術雑誌の違い、電子版のフルテキストの利用方法、検索結果を評価する方法についても説明する。
- ⑧ まとめ：教員が図書館員による説明内容を要約し、課題となっている小論文の作成に図書館の利用が重要になることを伝える。

全体をとおして、図書館員が、データベースの検索方法の説明とデモをもとに、情報探索において注意すべき点や関連する図書館サービスについて説明することによって、学生がデータベースの検索法を中軸として、情報探索や図書館サービスへの理解を深めることができる構成になっている。主な特徴は、説明と検索のデモンストレーションからなる各ユニットを5分から10分のあいだの短時間にまとめ、学生の集中力が途切れないようにしていることである。また、不明な点があれば、いつでも図書館員にたずねられることを繰り返し伝え、科目関連指導の後にもフォローアップができるようにしている。セッション中にも、各ユニットの説明後に学生からの質問を受け付けながら、話しを進めている。

2. 3. 2 クイーンズ大学の科目関連指導

クイーンズ大学（Queen's University）は、カナダのオンタリオ州にある中規模の研究大学である。中央図書館を持たず、各部局の図書館の独立性が高いことに特徴がある。部局によって温度差があるが、各図書館は各部局の教員や学生に多様な学習支援や教育支援を提供している。ここでは、教育学研究科の図書館で実施された「教育実習（数学）のためのワークショップ」について紹介する。

教育学研究科の図書館には、情報リテラシー教

育を担当する2名の図書館員がいる。そのうちの1名がこの科目関連指導を担当している。これは、数学の教育実習に行く学生のための準備となる120分ワークショップである。参加者は約40名の学生と教員である。場所は、教育学研究科図書館の閲覧室の一角にあるアクティブ・スペースである。そこには、6名から8名のグループ用のテーブルを6つ用意している。各テーブルには、①から⑥の資料等をそれぞれ準備している。

- ① 教科書と教員用のガイドブック
- ② エリソン・マシン（Ellison machine）、大型本、ポスター、DVD、CD
- ③ 数学の授業設計のための情報源
- ④ 数学の教員のための中央審議会の資料
- ⑤ 数学に関する絵本
- ⑥ ビデオ・ストリーミング（PC）

学生は、5名から6名のグループをつくり、20分ごとにテーブルを移動して、各テーブルに置かれている資料を読んだり機器を操作したりしながら、事前に配布されているワークシートに回答を書き込む。図書館員と教員は、各テーブルを巡回しながら、個別に指導をする。最終的には、すべてのグループが①から⑥までのすべてのワークシートを完成させる。このうち、エリソン・マシンとは、色紙の型抜き機のことである。色紙と型抜き版をそのマシンにセットして挟み込むと、一瞬にして色紙を多様な形にくりぬくことができる。例として、時計の型抜き版を使用したときには、時計の本体と針の部品が型抜きされる。それらの中央を針金でつなぐと、針が動く時計の模型ができる。これを、時間に関する学習で使用したりする。エリソン・マシンは教育学研究科の図書館内でいつでも利用できるようになっているために、これについても教材として、ワークの対象になっている。

この科目関連指導は、短時間ではあるが、教育実習で必要になったり有用になったりする情報資源について、学生が多面的に利用する機会になっている。全体は各グループによるワークが進めら

れるが、冒頭で、図書館員が各資料等の概要について簡単に説明をするとともに、個別の指導で、各資料の特徴を丁寧に説明している。印象的なのは、アクティブ・スペースの周囲の低書架等に、数学に関する多数の児童書が展示されていることである。図書館員の説明の中でも、数学に関する児童書を用いることで、数学に対する子供の関心を高めることができると伝えている¹⁰⁾。

2. 4 科目関連指導の設計と運用

2. 4. 1 科目関連指導の設計

科目関連指導の学習成果を高めるには、図書館員が対象となる授業科目の内容や方法について十分に理解した上で、その授業科目にカスタマイズした科目関連指導を設計することが重要である。主として、前述のアーラム・カレッジの例をもとに、設計の手順を説明する¹¹⁾。

- ① 図書館員が、学期の始まる2～3週間前に、Web上にアップされた講義要綱を読んで、支援対象とする授業科目を抽出する。支援対象として抽出するのは、主として、レポートやグループワークなど課題探求型の課題を与えている授業科目である。
- ② 図書館員が、①の担当教員に、図書館員による支援の必要性を確認し、実施日を決定する。
- ③ 図書館員は、授業科目のシラバスを読んだり、授業を聴講したり、教員と打ち合わせをしたりして、授業内容や課題のテーマについて理解を深め、そのテーマに関する一次資料や二次資料、データベースを検討してパス・ファインダーを作成し、Web上で公開する。
- ④ 指導当日には、図書館員が、パス・ファインダーを示しながら、テーマに関する検索式を用いて、情報の探索法、情報の入手法について説明する。

科目関連指導については、各授業科目にカスタマイズした支援を設計することが重要になる。その理由として、多くの学生は図書館の利用そのものに関心を持つのではなく、課題の達成に役に立

つから図書館の利用に関心を持つことがある。学生の関心を高めるためには、図書館員が設定する時事問題等の一般的なテーマではなく、授業科目で与えられる課題のテーマに関する情報資源や探索法を紹介することが有効である。また、レポート等の課題探求型の課題を与える授業科目を重点的に支援しているのは、情報利用へのニーズが高い授業科目であると判断するからである。情報を探索するという目の前のニーズがあるからこそ、学生は情報探索を学ぼうとするのだと考えて、そのニーズが高いと考えられる授業科目を重点的に選択している。実施日についても、配慮が必要になる。その課題のテーマを設定した直後が情報利用に対する学生の関心が高まるために、その時を教える好機（teachable moment）と考えて、そこに実施日を設定している。だが、多くの教員は学期始めに実施することを望む。これによって、学生が学期をとおして効果的に情報を探索するようになると考えるからである。だが、学期始めでは、情報探索に関する学生の関心が低いために、この時期に科目関連指導を実施しても、学生が実際に課題に取り組むときには、その内容を忘れてしまっている。そのために、探索すべき情報が具体的に合った教える好機に実施日を設定するのが有効である¹¹⁾。

科目関連指導は担当教員にとっても有用である。教員による主な評価は次のとおりである¹²⁾。

- ・科目関連指導を受けた学生は質の良い課題を提出するので、成績評価の作業が楽になった。
- ・専門分野に関する新しい知識を入手し続けるには多大な労力が必要になる。科目関連指導によって、専門分野の最新の動向を知ることができた。
- ・紹介されたデータベースの中で、今回初めて知ったデータベースがあった。今後、活用したい。

教員に科目関連指導を案内するときに、よい返事が得られないときには、これらの利点を伝えることも有効であるかもしれない。

教員への案内時に注意すべき主な点として、図書館の専門用語を使いすぎていないか、教育という文脈の中でなぜ科目関連指導が重要になるのかを教員の観点からわかるように説明できているかがある。図書館の専門用語については、科目関連指導の中でも同様であるが、書架という用語であっても、きちんと伝わっているのかどうかについて、聞き手の反応等を小まめに確認しながら説明を進めることが必要になる。また、教員の観点から教育における図書館の有用性を説明できるようにするために、大学教育改革の動向やアクティブラーニングと図書館の関係について、自信を持って簡潔に説明できるように準備しておくことも重要である。

2. 5 パス・ファインダー

パス・ファインダー (pathfinder) は、情報を探索するための道案内で、特定のトピックに関する資料や情報を系統的に集める手順をまとめた一枚もののリーフレットのことである。系統だった調査の手順を示し、さまざまな特徴をもつ多様な情報資源を案内する。近年では、電子版で作成され、Web 上で公開されることも多い。科目関連指導の教材として使用されることもある。その場合には、指導後にも、学生がこれを手がかりにして情報を検索できるという利点がある。

パス・ファインダーの問題として、トピックが大きすぎると利用しにくいことがある。そのため、各授業科目や課題の主題を反映させたパス・ファインダーの作成を試みる大学も見られるようになった。千葉大学、名古屋大学、三重大学では、「授業資料ナビ」として、各授業科目に特化したパス・ファインダーを作成し、Web 上で公開している^{13) 14) 15)}。千葉大学と三重大学の授業資料ナビは、印刷版のことを考えて、A4 サイズの両面印刷で1枚で完結する仕様になっている。パス・ファインダーについても、授業科目や課題のテーマで作成することが要点になっている。これは、科目関連指導と同様で、学生が情報探索に関心を示すのは授業科目や課題を達成するためである。作成の手順についても、科目関連指導と同様で、図書

館員が、教員との打ち合わせを重ねながら授業科目の内容や課題に関する理解を深め、それをもとに作成している。三重大学では、「建築計画Ⅰ」および「建築経営工学Ⅱ」という建築学科の専門科目のパス・ファインダーについて、教員と図書館員が打ち合わせを重ねながら作成している。その中で、各雑誌の説明については担当教員が作成した¹⁵⁾。

3. 教育支援サービス：教育開発

3. 1 教育開発と教育支援の枠組み

教員の図書館観が学生の図書館利用に大きな影響を与えるために、学習支援と合わせて、教育支援のあり方を検討することが重要になる。特に、多くの教員にとって、学生時代に利用した図書館と現在の図書館では、空間の構成やサービスの内容も大きく異なることがあるために、現在の図書館の機能やサービスを伝えることが重要になる。

教育支援の主な目標は次のとおりである。

- 教員が、図書館が学習や教育を支援する機関であることを認識する。
- 教員が、図書館サービスや情報サービスを組み入れて授業を設計できるようになる。
- 教員が、課題探求のプロセスにおける情報利用の注意点と対策について理解する。
- 教員が、自身の情報リテラシーを向上させる。

教育支援の要点は、教員が図書館の学習・教育支援機能への理解を深め、図書館サービスや多様な情報資源を組み入れて授業を設計したり、学生に情報利用について効果的に指導できるようになったりすることである。教員自身の情報リテラシーの向上を図ることも目標に含まれるが、これを前面に出すと抵抗感を持つ教員もいることが予想されるために、他の目標を前面に出して支援をする中で、この目標も付随して達成できるという戦略が有効だと考えられる。

FD は、ファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development) の略称で、組織的な教育開発を意味する。2008 年の大学設置基準の改正によ

り、それまで各大学の努力義務だったFDが義務化された。FDには、学習支援と同様に、多様な活動が含まれる。教育支援を図書館が実施するFDと捉えることができる。

教育支援の枠組みについて、FDの枠組みを示した「FDマップ」が参考になる（表4）¹⁶⁾。

表4 FDマップ（国立教育政策研究所，2009）

横軸（レベル）：FDを実施する対象
縦軸（フェーズ）：FDを実施する対象者の段階

レベル フェーズ	ミクロ 個々の教員 授業・教授法			ミドル 教務委員 カリキュラム・プログラム			マクロ 管理者 組織の教育環境・教育制度		
	目標	方法	評価	目標	方法	評価	目標	方法	評価
I. 導入(気づく・わかる)									
II. 基本(実践できる)									
III. 応用(開発・報告できる)									
IV. 支援(教えられる)									

FDマップは、対象者と内容のマトリックスになっている。横軸がFDを実施する対象者で、ミクロ、ミドル、マクロの3つのレベルからなる。ミクロは授業を担当する個々の教員であり、ミドルはディプロマ・ポリシーの策定やカリキュラムの見直しにかかわる部局の教務委員である。マクロは大学全体の教育改革を調整する立場にある学長や理事等の執行部である。縦軸は実施するFDの内容である。フェーズ1が基本的な内容であり、フェーズ2、フェーズ3になるにつれて、より発展的な内容になる。フェーズ4は他の教員のメンターを務める教員のための研修内容である。

情報リテラシー教育の枠組みと同様に、各大学にすべてのレベルやフェーズのFDを実施することが期待されているのではなく、各大学の文脈やニーズに応じて必要なFDを展開していくことが求められている。

3. 2 教育支援の事例

3. 2. 1 新任教員への図書館サービスの案内状

アールム・カレッジでは、カレッジへの着任が決まった教員に、図書館長が図書館のサービスを紹介した手紙を送付している。主な内容は、授業に必要な文献があればいつでも購入できること、図書館がいつでも支援できることである。多くの教員がこの手紙を受け取ってすぐに図書館に支援

を依頼したわけではないが、図書館が自分たちの授業を支援する機関であることを強く印象づけられている⁹⁾。

図書館長からの案内状に加えて、着任した教員の専門分野を担当する図書館員も、その教員に電子メールを送り、自分がその専門分野を担当する図書館員であること、いつでも支援できることを伝えている⁹⁾。

3. 2. 2 新任教員への図書館サービスの案内

ミシガン大学は米国の大規模な研究大学である。中央図書館をはじめとする学内の図書館には多くの図書館員がいるが、芸術・デザイン研究科、古典学研究科などには、部局に派遣された図書館員であるフィールド・ライブラリアンがいる（4. 1 参照）。フィールド・ライブラリアンは、担当する部局に教員が着任すると、図書館サービスについて説明した案内を電子メールで送付したり、個別の面談によってその教員の図書館に関するニーズ等を明らかにしたり図書館が所有するデータベースを紹介したりしている¹⁷⁾。

3. 2. 3 新任教員のオリエンテーション

アールム・カレッジでは、カレッジが主催する新任教員のためのオリエンテーションの一環で、図書館関係者が図書館サービスの案内をしている。主な目的は図書館がいつでも教員を支援できることを伝えることであるために、図書館サービスについて長時間にわたって詳しく説明するのではなく、短時間での案内にとどめている。案内を担当するのは図書館長や図書館員であるが、これまでに科目関連指導を採用したことがある教員がその経験を話すこともある。

3. 2. 4 教育開発ワークショップ

アールム・カレッジの図書館では、夏季休暇中に、教員と図書館員がレポートやグループ研究など課題探求型の課題の設定や指導方法について検討する1日規模のワークショップを開催している。検討の過程で、教員同士、教員と図書館員が情報や意見を交換することを重視している。主な

内容は、新しい情報資源と新しい課題、研究プロセスの指導、特定の分野の情報探索法、剽窃についてである。

冒頭で図書館員が新しい情報資源や研究プロセス、学生の情報利用に関する問題等を説明した後には、各教員が日常の問題を共有し、その解決策を全員で検討する。剽窃については、近年、大きな問題となっているために、検討内容に加えている。図書館員がレファレンス・デスクで学生の剽窃に気づくことが多くある一方で、教員も問題として認識するようになった。剽窃が問題であることを知らない学生もいるために、伝えていくことの重要性や伝え方、対処法について検討している。

3. 2. 5 教育開発・研究開発週間

ミシガン大学では、学内の教育研究支援組織が、それぞれ、教員を対象とする教育支援や研究支援に関するワークショップを日常的に開催している。これに加えて、附属図書館や学習教育研究センターを含む学内の教育研究施設が Teaching and Technology Collaborative (TTC) という連携組織をつくり、年に一度、5月の1週間を「教育開発・研究開発週間 (Enriching Scholarship)」に定めて、教育開発や研究開発に関するワークショップやセミナーを同時に開催している。教職員は、自らの関心に応じて、希望するワークショップやセミナーに参加する。2012年には、全体で133のセッションを開催し、803名が合計2879のセッションに参加した¹⁸⁾。

3. 2. 6 教員のための図書館案内

必要な情報に手軽にアクセスできるように、トピック別に背景や要点を簡潔にまとめた1枚もののガイドを作成して、教員の教育活動を支援する試みもある。前述のパス・ファインダーの教員版である。対面型の教育支援ではないが、FDマップのうち、ミクロ・レベルの導入フェーズに位置づけられる。

これには、国外の例を参考にして作成した、三重大学附属図書館の「Lib コンシェルジュ」や名古屋大学の高等教育研究センターの「ファカル

ティガイド」がある^{19) 20) 21)}。主な目的は、大学教育改革や教育開発に関する情報量は膨大であるために、どの情報から入手してよいのかわからずに困っている教員に最初の手掛かりを与えることにある。1つのトピックを設定して関連する事項の概要や参考文献等を示すことで、教員が自ら教育開発に取り組むのを支援することができる。A4両面の1枚分という限られた情報量であるために、概要を知るのに適しており、大きな負担もなく利用することができる。

3. 3 教育支援の設計と運用

以上の教育支援に関する事例をもとに、教育支援の設計や運用の要点を次にまとめる。

- ① 新任教員へのアプローチに重点を置く。
 - ② 図書館や図書館員が協力的であること、親しみやすいことを印象づける。
 - ③ 教員が教員を支援する場を設定する。
 - ④ いつでもどこでも支援する。
 - ⑤ 大学の本部、学内のFD担当の部局、学習・教育・研究支援組織と連携する。
-
- ① 新任教員へのアプローチに重点を置く：新任教員は、新しい考えや提案への受容力があり、図書館への協力を得やすいために、新任教員を主な対象にしている。
 - ② 図書館や図書館員が協力的であること、親しみやすいことを印象づける：図書館を研究支援の機関であると認識してはいるが、学習支援や教育支援の機関であると認識していない教員が多くいる。教育に関するものでも、学生の学習に関するものでも、情報利用について質問があれば、いつでも図書館員にたずねられることを伝えている。
 - ③ 教員が教員を支援する場を設定する：図書館関係者が教育支援の講師を務めるだけでなく、教員が他の教員を支援したり、教員同士が経験や意見を共有したりする場を設けている。これによって、教育活動における図書館の役割について、教員がよりよく理解するこ

とができる。これは、図書館員がFD活動の場を設定していることにもなる。

- ④ いつでもどこでも支援する：オリエンテーションやワークショップを開催するだけでなく、教員が必要な時に図書館やその情報資源を利用できるようなガイドを提供している。また、図書館員がいつでも支援できることを伝えている。
- ⑤ 大学の本部、学内のFD担当の部局、学習・教育・研究支援組織と連携する：すでに学内で実施されているプログラム等の一部に図書館が企画する教育支援を組み入れたり、教育開発を担当する部局等と連携しながら教育支援を実施したりしている。これによって、より多くの教員の参加を得られるとともに、教育や大学の活動に図書館を明確に位置づけることができる。

4. 学習支援・教育支援の実施体制の整備

4. 1 新しい実施体制のモデル

大学図書館が効果的な学習支援や教育支援を実現するためには、実施体制を整備することも重要である。北米では、大学内の裁量経費その他の予算を工面して、新たな体制を整備する例も見られる。

4. 1. 1 フィールド・ライブラリアン

ミシガン大学では、特定の部局の教員や学生に学習支援や教育支援などの図書館サービスを提供するために、2001年にフィールド・ライブラリアンを設置した。設置した部局は、古典学研究科、美術・デザイン研究科、女性学研究科である。フィールド・ライブラリアンは、部局に派遣される図書館員で、部局にオフィスを持ち、部局の学生や教職員との交流を深めながら学習支援や教育支援を提供する。

主な業務内容として、コレクションを構築すること、図書館が主催する委員会に参加すること、レファレンス業務を担当すること、学習支援を担当することなど他の図書館員と同じ業務に加えて、部局が決定した業務を遂行することがある。部局

が決定した業務の内容は派遣された部局によって異なる。部局のカリキュラム委員会に出席して新設の授業科目に科目関連指導を組み入れたり、新任教員と個別に面談して図書館サービスの案内をしたり、教員と共同で文化行事を企画したりしている。学生や教員は、フィールド・ライブラリアンのオフィスに立ち寄って質問をしたり、廊下で偶然に会ったときに質問を伝えたりしている¹⁷⁾。

4. 1. 2 教育支援センターへの図書館員の配置

カナダのオンタリオ州にある大規模の研究大学であるウエスタン・オンタリオ大学では、2004年に情報リテラシー・コーディネーターを務める図書館員をFDを主業務とする教育支援センター(Teaching Support Centre)に配置し、図書館と教育との連携を図っている。その背景には、2003年に策定された「ウエスタン・オンタリオ大学の情報リテラシー行動計画」がある。これを実現することが主な目的である。

この図書館員は、図書館に所属するが、オフィスを教育支援センター内に持つ。主な役割は、次のとおりである。

- 学内で実施中の情報リテラシー教育に関する活動を明らかにする。
- 情報リテラシー教育を担当する図書館員に資質開発の機会を提供する。
- カリキュラムにおける情報リテラシー教育の価値を高めるために、教員や教育支援センターと連携して学内で実施中の情報リテラシー教育をより高い成果を得られるものにする。

この図書館員は、教育支援センターで教育開発の専門職員との交流を深めながらセンターの関係者に図書館に関する情報を伝えたり、図書館の委員会や活動をととして大学内の教育開発関係のプログラムや教育に関する情報を図書館の関係者と共有したりして、両者の連携を図っている。

4. 2 学習支援・教育支援を担当する図書館員のための支援

図書館員が学習支援や教育支援を効果的に設計・運営できるようにするために、図書館内外で多様な支援体制が整備されている。

4. 2. 1 教育・学習のためのワーキング・グループ

クイーンズ大学では、2011年に図書館員の有志がワーキング・グループ（Teaching and Learning Working Group）を組織して、情報リテラシー教育プログラムの設計や評価に関する多様なワークショップやコンサルティングを他の図書館員に提供している。このワーキング・グループの前身は、Teaching Tea という図書館員の非公式の集まりである。茶菓を楽しみながら、図書館サービスに関する情報や意見を定期的に交換していた。

4. 2. 2 インストラクター・カレッジ

ミシガン大学の図書館には、2001年に図書館員の資質開発を支援する組織である Instructor College が設置された。図書館員が情報リテラシー教育を設計・運営するのに必要になる指導スキルの向上を支援するプログラムを提供したり、オンライン上のコミュニティ（Instructor College Cafe）を立ち上げて関連する情報や教材を共有したりしている^{23) 24)}。

4. 2. 3 FD ワークショップへの参加

ウエスタン・オンタリオ大学では、教育支援センターが主催する新任教員のための授業設計に関するワークショップに、図書館員も参加している。授業と情報リテラシー教育は同様の手順で設計することができるからである。ワークショップに参加した図書館員が参加者の教員と授業や図書館に関する情報を共有するなど、教員と図書館員が交流を深める機会にもなっている。

4. 2. 4 支援スタッフの雇用

アーラム・カレッジの図書館では、レファレンス・デスクを担当する支援スタッフを雇用することによって、学習支援を担当する図書館員によるレファレンス・デスクの担当時間を削減している。

これによって、図書館員は学習支援に関する業務により多くの時間と労力を割り当てることができる。国内では、静岡大学附属図書館が、学習支援を担当する図書館員の通常業務への影響を少なくすることを目的として、学生アルバイトを雇用している²⁵⁾。

5. 北米の事例から見えること

5. 1 ファシリテーターとしての図書館員

教員の役割は、学生が学習目標を達成するために、効果的な教育・学習のプロセスを設計、実行、評価することである。図書館員の役割は、図書館サービスのファシリテーターとなって、教員が設計した授業科目の学習目標を最大限に達成できるように、情報資源の活用を促進したり調整したりすることであると考えられる。

北米の図書館員は、ファシリテーターとなって、図書館のサービスを学生の学習活動や教員の教育活動にしっかりと組み入れようとしている。そのために、個々の教員や大学の関係者との交流をとおして学内の情報利用に関するニーズを予測し、その上でそれぞれの状況にカスタマイズした支援を設計している。これは、把握したニーズをもとに、大学内の情報資源や人的資源を効果的に結びつけようとする事前対策的な（proactive）アプローチである¹¹⁾。

5. 2 図書館外の関係者との連携

北米の図書館では、図書館員が、教員や教育開発関係の専門職員その他の大学関係者と知見や情報を共有したり、教員、他の部局、大学と連携しながら学習支援や教育支援を設計・運用したりしている。図書館外の大学関係者と連携することによって、学習や教育に図書館を位置づけることができるとともに、高い成果を得られる学習支援や教育支援を実現することができる。

図書館外の関係者と連携するために、顔見知りになれる規模のコミュニティやチームをつくり、それをもとに、個別の支援をしたり、教育と図書館の連携のモデルをつくったり、共同のプログラムを企画・運営したりしている。これは、実践コ

コミュニティ (community of practice) をつくることにもつながる話になる²⁶⁾。

謝 辞

本稿は2012年12月13日に名古屋大学附属図書館で開催された東海地区大学図書館協議会研修会で発表した内容に加筆・修正したものです。発表の準備から本稿の作成まで、名古屋大学附属図書館の皆様にはたいへんお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

本稿で紹介した事例の調査については、次の助成を受けています。アールム・カレッジについては科学研究費補助金(若手研究B)「ファカルティ・ディベロップメントの視点を取り入れた大学図書館の教育支援機能研究」(2004年度および2005年度)、ミシガン大学については科学研究費補助金(若手研究B)「教育活動を背景とする教員と図書館員の協力関係:ミシガン大学の事例研究をもとに」(2006年度および2007年度)、ウエスタン・オンタリオ大学については科学研究費補助金(若手研究B)「大学教育における教員と図書館員の連携:ウエスタン・オンタリオ大学のケーススタディ」(2009年度および2010年度)、クイーンズ大学については東北大学高等教育開発推進センター・大学教育支援センター「大学教育マネジメント人材育成プログラム(Queen's-Tohoku Joint Program for University Education Managers and Developers)」教育関係共同利用拠点(国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点)「三重大学附属図書館が実施する学習支援・教育支援:教員と図書館員の連携の構築を中心に」(2011年度)および科学研究費補助金(基盤研究C)「大学教育における教員と図書館員の連携の構築に関する比較研究」(2012年度から2014年度)です。

注・参考文献

- 1) 中央教育審議会. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申). 文部科学省. 2012, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm (参照 2013-08-30)
- 2) 中央教育審議会の答申(注1)では、学修とい

う表現を用いている。発表時のタイトルで学習という表現を使用したために、本稿では学習という表現に統一した。

- 3) Association of College and Research Libraries. 高等教育のための情報リテラシー能力基準. 2000, <http://www.ala.org/acrl/sites/ala.org.acrl/files/content/standards/InfoLiteracy-Japanese.pdf> (参照 2013-08-30)
- 4) 日本図書館協会・図書館利用教育委員会. 図書館利用教育ハンドブック:大学図書館版. 日本図書館協会, 2003, 209p.
- 5) “大学図書館の経営に関する調査”集計結果,”今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館)報告書. 国立大学法人筑波大学, 2007.3, p.113. (文部科学省「先導的大学改革推進委託事業」研究代表者:永田治樹)
- 6) 例として, Jacobson, T. E., & Mackey, T. P. eds. Information Literacy Collaborations That Work. New York, Neal-Shuman, 2007, 264p.
- 7) 渡邊貴子. “教員と職員の専門性をいかした協働の試み:教職科目における協働授業の実践”静岡大学教育研究, No.9, 2013, p.55-62.
- 8) 久保山健. “図書館スタッフによる学習支援の実践:「プレゼン入門 話す基本技術」”大阪大学高等教育研究, 2012, No.1, p.77-83.
- 9) 長澤多代. “アールム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ”Library and Information Science, No.57, 2007, p.33-50.
- 10) クイーンズ大学の観察調査:2012-09.
- 11) 長澤多代. “大学教育における教員と図書館員の連携を促す図書館員によるカスタマイズ型の学習支援:アールム・カレッジのケース・スタディをもとに”日本図書館情報学会誌, Vol.58, No.4, 2012, p.185-201.
- 12) Hardesty, Larry L., Hastreiter, Jamie, and Henderson, David eds. Bibliographic instruction in practice: a tribute to the legacy of Evan Ira Farber, Ann Arbor, Pierian Press, 1993, 157p.
- 13) 千葉大学附属図書館. 授業資料ナビ. <http://alc.chiba-u.jp/pathfinder/index.html> (参照 2013-08-31)

- 14) 名古屋大学附属図書館. 情報への道しるべ：授業資料ナビ. <http://pathfinder.nul.nagoya-u.ac.jp/> (参照 2013-08-31)
- 15) 三重大学附属図書館. 授業資料ナビ. http://www.lib.mie-u.ac.jp/info_education/navi/ (参照 2013-08-31)
- 16) 国立教育政策研究所 FDer 研究会編. 大学・短大でFDに携わる人のためのFDマップと利用ガイドライン. 国立政策研究所, 2009.3, 26p. 入手先 <http://www.nier.go.jp/koutou/projects/fder/index.html> (参照 2013-08-31)
- 17) 長澤多代. “ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ：フィールド・ライブラリアンの活動を中心に.” *Library and Information Science*, No.70, 2013 (印刷中)
- 18) Teaching and Technology Collaborative. Enriching Scholarship. <http://ttc.iss.lsa.umich.edu/ttc/enriching-scholarship/> (参照 2013-0901)
- 19) 三重大学附属図書館. Lib コンシェルジュ. http://www.lib.mie-u.ac.jp/info_education/concierge/ (参照 2013-09-01)
- 20) 名古屋大学高等教育研究センター. ファカルティガイド. <http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/facultyguide/> (参照 2013-09-01)
- 21) 伊藤奈賀子. “FD ガイドの FD 機能—日本語リテラシーを事例として” *名古屋高等教育研究*, No.11, 2011, p.115-132.
- 22) Queen's University Library. Library Advisory Committee for the Humanities and Social Sciences Meeting Minutes (2011.11.30.). <http://library.queensu.ca/inforef/advisorycomm/minutes/2011nov.htm> (参照 2013-09-01)
- 23) Yocum, P.; Brandley D.; Forrester A. *Instructor College: Promoting development of library instructors. From Integrating Information Literacy into the College Experience*. Nims, J. K. et al. ed. Pierian Press, 2003, p.199-203. (Library Orientation Series)
- 24) The University Library at the University of Michigan. Instructor College. <http://www.lib.umich.edu/committee/instructor-college/>, (accessed 2013-08-30)
- 25) 静岡大学. 組織評価 (平成 24～25 年度実施分): 静岡大学附属図書館 自己評価書. http://www.shizuoka.ac.jp/outline/info/hyoka/index_24_25.html (参照 2013-09-01)
- 26) 実践コミュニティとは、あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団のことを意味する。(ウエンガー, E. ほか. *コミュニティ・オブ・プラクティス：ナレッジ社会の新たな知識形態の実践*. 翔泳社, 2002, 398p.)